

「山鹿素行から私が学んだこと」

関西福祉大学社会福祉学部・3回生・小西朋輝

1 あの未曾有の震災のこと・・・

(1) 各国からの励ましのメッセージ

この度の災害は、未曾有のものであった。多くの人命が失われ、建物は、がれきと化してしまった。

そのような甚大な被害に、多数の国々からメッセージが寄せられた。このような多数のメッセージが寄せられた国は他にはないと聞いている。これらは日本人の高いモラル、謙虚さ、勤勉さ、静かな底力への尊敬の念に基づくものである。

被災地の人々は、今、懸命に生きている。そして、復興へ向けて、静かなる努力を重ねている。

(2) 東北の人々の心のなかにあるものは・・・

その東北の人々の、静かな底力、ひたむきな姿勢がどこから出てくるかと考えるとき、宮澤賢治の「雨にも負けず」という詩を思い起こす。

その詩は、賢治の没後に発見された手帳に記されたもので、そこには、次のように記されていた。

「雨にも負けず」

雨にも負けず、風にも負けず
雪にも、夏の暑さにも負けぬ、
丈夫な体をもち
慾はなく、決して怒らず、
いつも静かに笑っている
一日に玄米四合と、味噌と、
少しの野菜を食べ
あらゆることを、
自分を勘定に入れずに
よく見聞きし、分かり、
そして忘れず
野原の、松の林の陰の、
小さな、萱ぶきの小屋にいて
東に病気の子供あれば、
行って看病してやり
西に疲れた母あれば、
行ってその稲の束を負い

南に死にそうな人あれば、
行って、怖がらなくてもいいと言い
北に喧嘩や訴訟があれば、
つまらないからやめろと言い
日照りの時は涙を流し、
寒さの夏はおろおろ歩き
みんなに、木偶坊（でくのぼう）と呼ばれ
褒（ほ）められもせず、苦にもされず
そういうものに、私はなりたい

この詩の中で最も美しいのは、「あらゆることを、自分を勘定に入れずに」にあると思う。この美しく、そして、崇高な心の表現を、賢治は言いたかったのである。

そして、詩には、常に、他者に寄り添い、人のために尽くしたい、そういう人になりたいとの願いが込められている。

私は、賢治が願う、崇高なところ、寄り添うところが、東北の人々の意識の奥深くにあること、それが、静かなる原動力を生み出しているのだと思う。

私は、今、福祉の道を目指して学んでいるが、この詩こそ、福祉の専門職としての今後の生き方を明確に指し示す「道しるべ」であると思う。

私は、その土地に、その地域に、そのようなところが、深く、染みついていることが大切だと考える。しかし、そのような土地・地域は、日本全国を見回しても、必ずしも多くはない。

赤穂は、そのような貴重な土地・地域の一つではないかと思う

2 山鹿素行について

赤穂と言えば、忠臣蔵、今も、多くの人々のところをゆり動かしている。その働きの基礎となったのは、山鹿素行の教えであったとされている。しかし、私は、赤穂に来るまでは、詳しいことは知らなかった。

(1) 素行とは、どんな人であったか

素行は、今から390年ほど前に、福島県に生まれている。この度の未曾有の大震災に見舞われた地域である。全くの偶然ではあると思うが、そこには、大きな意味が含まれているのかもしれない。

素行は、6歳の頃、江戸に移ったとされる。その頃から学問を学び、8歳で、中国の四書・五経・七書・詩文などを学んだとされる。儒教を学び、詩や文章をつくる才能に恵まれ、秀才と言われた。

15歳の時には、戦についての学問である兵法、武術、神道なども研究していた。その素行は、赤穂の城主、浅野長直（ながなお）の求めに応じて、赤穂にきて、赤穂藩の家臣をはじめ、多くの門弟に儒学や兵学の講義をした。

しかし、その過程で、素行は、自分が教えている学問が、日常生活に結びついてないと感じた。そして、赤穂家に仕えていたのでは、その自分の考えを深めることはできないと、約8年の赤穂の生活を切り上げて、江戸に帰ることとした。

そして、江戸で研鑽を深める過程で、他の学者とは異なる考え方に到達する。すなわち、今まで学んできた学問が、難しい理屈ばかりで、日常の暮らしとは、あまり関係の無いものとなっていることに気づき、新しい考え方を提唱した。そして、「聖教要録」という本を出版し、教えを広めようとした。

しかし、その新しい考え方は、世間の学者から反対を唱えられ、素行は、江戸から追放され、再び赤穂の地に住むこととなった。それは、素行が45歳の時であった。54歳で罪を許されて江戸に帰るまでの10年間、赤穂に住むこととなり、再び、赤穂の人々を教えることとなった。

そのとき、赤穂浪士の頭として活躍した大石良雄は、当時8歳の少年その少年であった。その大石は、17歳になるまで、素行の薫陶を受けることになった。

武士としての心構え、なすべきことをしっかりと学んだことが、後の、47士の立派な働きとして実現する。

ということで、素行と赤穂は、強い絆で結ばれている。

(2) 素行の考え方

素行については、赤穂山鹿素行研究会で、研究が進められ、その考え方を広める努力がなされている。しかし、私は、私が理解した範囲内で、私の思う素行について話したい。

その教えは、江戸時代ということ为前提を考えなければならない。すなわち、もう戦争はなく、戦うものとしての武士の存在は不要だった。そうなれば、武士は目標を失ってしまう。目標を失えば、人間は、得てして悪い方向に変質してしまう。

そのような時代に、素行は、戦う武士から、「教養のある武士」を目指すことが大切だと教えた。つまり、人格的に優れており、国民の模範となる存在を目指すことが大切だと、新しい時代の武士の生き方を示した。

この時代の転換、それに伴う武士の役割の変換を思想的に裏付けたのが、山鹿素行の「士道」である。それは、人の道と言ってもよい

(3) 素行の言わんとするところ

人の道とは、人は、どのように生きるべきかということにある。素行の言葉に、次の

ようなものがある。

私たちの心がけとして、今日の仕事が最後の勤めだと思ってやるのが大切だ。一日を積み重ねて、一月、一月を重ねて一年となり、一年を積んで十年となる。十年が重なり百年になる。

また一日は、長く一刻の重なりである。一刻は、一分の重なりである。このように考えると、千万年の勤めも一分からはじまり、一日で終わる。一分をおろそかにすれば、一日がだめになる。最後には、一生の責任を果たさないこととなる。

つまり、一日を一生と思って、時を大切にし、一分一秒をおろそかにしないで、毎日をしっかり生きていくのが大切だということにある。そして、礼節ある行動をして欲しいということである。

私たちは、今、21世紀を生活している。しかし、この素行の考え方は、時代を超えて、私たちのところに響くものがある。

3 私の思うこと

ここからは、素行の教えから、私が考えることについて述べたい。

私は、赤穂にきて三年目となるが、この赤穂の地には、素行の考え方が、人々のところに染みこんでいることが素晴らしいと思う。

そして、それが、赤穂の人々の行動の原点となっていることに気づく。

山鹿素行の武士道の精神を私なりに現代風に当てはめると「自分を持つ」ということだと思う。

礼節も勿論大事だが、それ以上に、周りに流されて自分を見失うようなことになってはいけないと思う。

皆がそうして自分の意見をぶつけあううちに、今までにない新しい発想が生まれ、新しい創造が始まる。

今の日本は便利な国には違いないけれど、日本にいるのに日本を感じられない場所だという気がする。

それで失くしたものを取り戻そうとする時、僕は今住んでいる赤穂という地域に可能性を感じる。品格を大切に守ろうとしているし、守るためには余計な物を入れないという発想も強い気がする。

もしかしたら今の日本に必要なスタイルは、こういうところなのかなと感じる。地方には、今の状態を打開する力が潜んでいるということ、実は、皆前から気づいていると思う。

実際、地方の力が中心を変えていくようなことも少しづつ言われているけれど、まだ

皆がそうだと言ってる訳でもない段階と思う。だからそういう風に言ってしまうのは、何となく怖くて第一歩が踏み出せない。そういうところがある。

でも、それらにきちんと向き合う勇気を持たないと自分たちを形作っているそれぞれの人にとっての故郷といったものへの敬愛を示すことはできない。

都会や先進国の便利さに慣れきった状態から抜け出すのはとても難しい事だが、その気になれば実は簡単だという気もする。

物事を捨てる事や、関係性を断つことには確かに勇気が必要だと思う。

でも「終わり」とは「始まり」でもある。

「終わりに向かう」＝「終わってしまう」ではなくて、終わりは始まりのためにあるのだと思う。

断ち切ること、死ぬこと、諦めること。「終わり」が意味するものは、どこか恐怖をあおるものばかりである。でも、それを超えてこそ、新たな物事が始まると考えれば心の持ち方も変わってくる。

そういう考え方が出来た山鹿素行は、創造力が豊かだったんだなと、僕は感じた。

(2012年12月14日 於 兵庫県立赤穂高等学校)